

⇒ をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 大学生のための読書感想文コンクール

田中 康友  
(未来創造学部准教授・  
読書感想文コンクール審査委員長)

⇒ 第12回 北陸大学読書感想文コンクール 入賞者を表彰

⇒ 最優秀賞  
『なぜ「そうじ」を  
すると人生が変わるのか』  
を読んで

西東 輝  
(未来創造学部 国際教養学科 2年次生)

⇒ 優秀賞  
『ただマイヨ・ジョーヌ  
のためでなく』  
を読んで

波平 祐希  
(薬学部 薬学科 1年次生)

⇒ 優秀賞  
『この子達を救いたい』  
を読んだ感想

諸星 六郎  
(薬学部 薬学科 1年次生)

⇒ 優秀賞  
理解こそ真の解決のキー

郭 純  
(未来創造学部 国際マネジメント学科 4年次生)

⇒ 優秀賞  
『舟を編む』を読んで

谷口 真悠  
(未来創造学部 国際教養学科 3年次生)

⇒ 各審査委員から一言

⇒ 寄贈図書

⇒ 目次



北陸大学ライブラリーセンター報



## 大学生のための読書感想文コンクール

未来創造学部准教授・

読書感想文コンクール審査委員長 田中 康友



北陸大学に来て6年が過ぎようとしています。毎年夏休み前に読書感想文の課題を課すと、学生たちから「大学生にもなって読書感想文！」という不平・不満をぶつけられます。確かに、大学生にもなって、みんなで同じ文学作品を読んで、読書感想文を書かせるのであれば、このような不平・不満も一理あるでしょう。しかし、本学の読書感想文コンクールは、基本的に皆さんが読みたい本を読んで、感想文を書いてもらうことになっています。したがって、高校までの読書感想文コンクールとは異なる狙いを持っていることがお分かり頂けると思います。

では、どのような狙いがあるのでしょうか。

第一の狙いは、アウトプットを意識した読書の訓練です。社会人になったら、皆さんは様々な文章を読み解き、元の文章を見ていない人に内容を正確に伝えることを求められます。しかも、他人に説明することを意識して本を読もうとすると、漫然と本を読む時よりも数段理解度が高まります。普段からアウトプットを実践してほしいのですが、なかなか本を読んでその内容を友達と語り合ったりすることは少ないでしょう。したがって、読書感想文コンクールは、皆さんがアウトプットを意識して本を読む機会にぜひ利用してほしいと考えています。

第二の狙いは、自らの関心や問題意識に気付くきっかけにすることです。皆さんは、本から得られた知識や疑似体験から、学ぶことが多いと思います。しかし、自分の関心や問題意識にあった本でなければ、得られるものも半減してしまいます。読書感想文コンクールに出品するための本を選ぶのは、きっと普段何気なく生活しているときには見逃している自らの関心や問題意識を問いなおす機会になります。さらには本を読んで感想文を書くことで、皆さんの思考を発展させることができるでしょう。

二つの狙いを考慮して、私自身は、二つの審査基準を設けました。一つ目は、皆さんが読んだ本の内容をきちんと伝えられているかです。二つ目は、本を読んで皆さんが考えたことをいかに皆さんの生活の中に教訓として活かしているかです。

今回の最優秀作品に選ばれました西東輝君の「『なぜ「そうじ」をすると人生が変わるのか』を読んで」は、上記の二つの審査基準から見て、大変良くかけている作品でした。卓球で世界進出を目指していた西東君は、怪我のために挫折を経験し、本学へ編入してきました。彼は、今も北陸大学という新たな環境で、卓球の世界の高みに立とうと、再度チャレンジをしています。西東君は、この本から人生の教訓を得て、さらなる飛躍を目指していることがよく分かりました。ぜひ西東君には、これからも“輝く”卓球選手であり続けてほしいと願っています。

## 第12回 北陸大学読書感想文コンクール 入賞者を表彰

読書感想文コンクールは学生の読書習慣の形成・向上とともに、個人的発想に基づく発表の機会を提供し、教育に資すること等を目的として実施されており、今年度で12回目を迎えました。今回初の取り組みとして、薬学部1年次生、および未来創造学部1～3年次生には事前登録制を導入いたしました。学内で発行している“読書手帳”などを参考に、読書感想文を書く予定の本を担当まで届け出てもらった結果、498人もの学生から事前登録がありました。実際に提出された303編の感想文は、担当が目を通して各クラスの代表作品が選抜され、113編に絞り込まれました。審査委員および審査協力員は、2か月程度の期間をかけて応募作品全てに目を通し、それぞれの視点から優れた感想文を選出し、最終の審査委員会により、次のとおり入賞作品が決定いたしました。



入賞者と審査委員の皆さん（平成25年1月22日）

### 入賞作品

・最優秀賞

西東 輝 『なぜ「そうじ」をすると人生が変わるのか』を読んで (未) 2年

・優秀賞

波平 祐希 『ただマイヨ・ジョーヌのためでなく』を読んで (薬) 1年

諸星 六郎 『この子達を救いたい』の感想 (薬) 1年

郭 純 理解こそ真の解決のキー (未) 4年

谷口 真悠 『舟を編む』を読んで (未) 3年

・佳作			
	澤野 楓	『スイッチを押すとき』を読んで	(薬) 1年
	廣瀬 愛姫	砂漠に雪を降らすということ	(薬) 1年
	渡辺 未央	『子どもの宇宙』を読んで	(薬) 1年
	松崎 亜里紗	『わたしの名前』を読んで	(未) 3年
	柚木 望希	人間の尊厳とは	(未) 3年
・努力賞			
	石田 由里香	私の妖怪観を一新した『姑獲鳥の夏』	(薬) 1年
	小泉 祐紀	『老人と海』を読んで	(薬) 1年
	佐久川 恵圭	オバァへの道のり	(薬) 1年
	田中 健斗	『密やかな結晶』を読んで	(薬) 1年
	張 俊	絶望から希望まで	(未) 4年
	北田 直人	『共喰い』を読んで	(未) 3年
	呉 洲洲	『どぶろくと女』の感想文	(未) 3年
	篠藤 深月	『ディズニー サービスの神様が教えてくれたこと』を読んで	(未) 3年
	西嶋 凌二	『子ども格差：壊れる子どもと教育現場』を読んで	(未) 2年
	石井 昂	『スイッチを押すとき』を読んで	(未) 1年

\* (薬) は薬学部、(未) は未来創造学部です。

## 最優秀賞

### 『なぜ「そうじ」をすると人生が変わるのか』を読んで

未来創造学部 国際教養学科 2年次生 西東 輝



書名 なぜ「そうじ」をすると人生が変わるのか  
著者 志賀内 泰弘  
出版社 ダイヤモンド社

私がこの本に出会ったのは約一年前です。一年前というのは私が人生で初めての挫折を味わった時期でした。小さい頃からの夢であった海外進出を目前としながら、肘を故障してしまい断念せざるをえなくなりました。今までに無いほどのショックを受けた私は部活に勉強に私生活にまでも影響し、自分を見失っていました。そんな時に出会ったのがこの本です。

この本は「そうじ」について書かれていますが、世の中に多く存在しているようなそうじをうまくする為の本ではありません。日本で初めて掃除を題材にした実話に基づいた小説です。主人公は特に特徴のないサラリーマンです。一人の老人との出会いがこの青年の人生を大きく変えるという話です。老人は高価

なスーツを着て公園のゴミ拾いをしています。その違和感の感じる光景に青年は老人に聞きました。「なぜゴミ拾いをしているのですか」と。老人は「拾った者だけがわかる」と返答しました。青年はこの答えに納得がいかず、自分もまず行動を起こしてみようと思えました。こうして始まった青年のそうじ。一回だけではわからないので毎日毎日そうじをしました。そして最後に会社の業績も上がり、お嫁さんももらいました。そこに至るまでの過程は本当に人生で誰もがぶつかる葛藤がわかりやすく書いてあり、そしてどう対処していけばいいのかが詳しく書いてあります。

これから私が感銘を受けた言葉を引用し、そして受けた印象を述べていきます。

まず先述した「拾ったものだけがわかるんだよ」という言葉です。行動したものだけがわかるという言葉に置き換えていいでしょう。私は当時様々な勉強をしていたつもりでしたが、どれも経験はしていない机上の空論でした。実際にやってみなければ説得力はないし、本当にわかったことにはならないんだ、ということ学びました。次に「全てはたった1つから始まる。その意味で0と1の差は1ではなく実はとてつもなく大きい。それこそ0と1の差は千も万も億も違う」という言葉です。まず一步踏み出すこと、それが本当に大事なんだということ。一步目をお粗末にはいけないんだと、そしてやる気を失ってトレーニングなどをサボり続けてきた自分が新たに始める勇気をくれた言葉です。次に「自分が見ているから自分が納得するように行動するのが気持ちいい」というもの。人間誰も人の評価というものが気になります。特に上司や先生など悪いところを見せたくはない人の評価は尚更気になるものです。そういう人たちの目を盗んで悪さをしてしまいがちです。自分が自分の行動から目を背けることは出来ないのだから、そんなことをしても意味無いよという事を教えてくれました。似たような内容で「何者にも左右されない裏表ない人間になること」という言葉があります。結局のところ、コソコソやっている行動は疲れるし後々ごまかしが利かなくなる。周りの人間に関係なく最初から自分の素直な行動をする方がいいという事だと思えます。自分のありのままを行動に移し、それで失敗したら注意を受けて気づき改善すればいいじゃないかという発想だと思えます。それが人間であって、怒られないように自分を隠しても成長はしていかないということに気づかされました。そして「仕事とは気づきが大事。気づきをたくさんする為にそうじをする」という言葉です。ただ与えられたことをするだけではなく、そこから自分がどれだけ気づきアレンジを加えられるかが大事ということだと思えます。この本ではそうじからその気づく能力を得られると述べています。そうじは細かなところまで見なければいけないので、そうじもただやるだけではなくアンテナを張り続けることが重要なのだと感じました。そして最も好きな言葉「人が喜ぶ顔を見るのってパワーになる、ということは人のためとか言いながら実はやっぱり自分の為。してやってるんじゃない、させて頂いているんだ。」人間なら誰でも人に尽くしてありがたうと言われたい。それが次第に見返りを求め始めてしまい、その人の為にしてることが、自分の利益のために行動していることが多々ある。そうではないんだという事を教えてくれました。これで恩着せがましい人間にはならなくて済んだと、この言葉を知った時思いました。最後に「限りある範囲の中でたくさん〇〇という計算をすればいい。人はすぐに大きな相手を見ると諦める。しかしどんなにたくさんでも、それが仮に1万でもそこから1を引けば9999になる。」という言葉です。例えば膨大な数の宿題があったとします。やる前から諦めるより、1ページずつでもやったら確実に減ってるということ。それが最後達成ということにつながるという発想です。どんなに大きな相手でもコツコツやればやがては終わりが訪れる。そこまで辛抱できるかが大事さということを学びました。

ここに挙げたものは代表例でまだまだたくさんこの本から学びました。そしてこの本だけで自分が挫折から這い上がったわけではありませんが、きっかけの一つになったということには間違いありません。そして私は友人から悩みなどの相談を受けたときはこの本を贈るようにしています。本というものは読者の捉え方で大きく変わるものです。同じ人が読んだとしても価値観や考え方が変わっているのだから、感じ方が違うくらいですから。ですので本との出会いというものは大事です。私はこの本に出会って本当に救われました。今後もこの様な衝撃を与えられる本と出会う事を楽しみにして本を選んでいきます。

(原稿受付 平成24年10月31日)

## 最優秀賞を受賞して

西東 輝

この度は最優秀賞を頂きありがとうございます。私は3歳から卓球を始め、以来18年間卓球一筋の人生を歩んできました。勉強をする為に大学進学された他の学生さんには当然知識では敵いません。しかしながら卓球を通じて「人としての生き方」や「男としての生き方」、その他道徳的な考え方はしっかりと学んできたつもりです。紛れもない自分の本心の意見を評価していただいたことがとても嬉しかったです。今後は意見だけでなく、行動もそれにふさわしい人間になれるようにしていきます。卓球、勉強ともに自分なりに精一杯していきますので、今後も応援をよろしくお願い致します。この度は本当にありがとうございました。

## 優秀賞

### 『ただマイヨ・ジョーヌの ためでなく』を読んで

薬学部 薬学科 1年次生 波平 祐希



書名 　ただマイヨ・ジョーヌのためでなく  
著者 　ランス・アームストロング  
出版社 講談社

癌は、しばしば先進国における死因のトップを占める。特に、日本は他の先進国に比べ比較的癌による死亡率が高い。中でもトップを占めているのは肺がんや胃がん、大腸がんなどだ。そんな中、日本人男性の10万人に一人の割合で発症すると言われるのが睾丸癌だ。頻度は極めて低い。転移は特に脳に多く、予後不良である。そんな睾丸癌を発症したのが、アメリカの一流自転車選手、ランス・アームストロングだ。

ランス・アームストロングは、1971年にアメリカのテキサス州で生まれた。21歳の時に史上最年少の若さで世界自転車選手権に優勝し、自転車界で注目を浴びていたが、1996年、25歳の時に睾丸癌を発病した。彼は後に出版するこの本でこう語っている。「病気は僕という人間を、屈辱的なまでに素っ裸にし、僕は容赦のない目で自分の人生を振り返ることを余儀なくされた。いくつものことが後悔とともに思い出された。卑劣なふるまい、未完成の仕事、自分の弱さなど。」「断言していい。癌は僕の人生に起こった最良のことだ。なぜ僕が癌になったかはわからない。けれども癌は不思議な力を与えてくれた。」また、彼はこうも言っている。癌は「人生でもっとも重要な、人生を形作ってくれたもの」であると。

私は彼のこの発言にとっても驚いた。私は癌になったことはないが、癌を発症した人は皆、そのひどく体力を奪う闘病生活から抜け出せたら、癌は体力もお金も消費するし、最悪の出来事だったと思うていた。しかし、ランス・アームストロングはむしろその逆で、癌が人生に起こった最良のことだと述べている。彼は、死を恐れることは貴重な教育だとも述べている。死を恐れることで、自分の弱さを認識し、人間としての自己を問い、これまでとは違った価値観を見出すことを強いられると。なるほど、と思った。癌という先進国では死因のトップに出てくる病気にかかると、その闘病生活はとても長いものとなる。その長い時間の中で、患者は死ぬかもしれないという恐怖と戦い、今までの自分の行動や考えを見直

すようになるのだと思う。闘病生活を支えてくれる周囲の人への感謝や、健康であることの素晴らしさを感じ、回復して元気になった自分を想像する。そして、回復することに対し強い希望をもって信じることで、彼は睾丸癌からの復活という素晴らしい切符を手に入れることができたのではないだろうか。ランス・アームストロングの回復することに対しての強い思いは本当にすごいと思った。彼は癌を徹底的に敵とみなし、睾丸癌についての治療法や、回復率などを隅から隅まで調べつくし、自分の検査の数値についても医師に質問を繰り返したという。最終的に、睾丸癌について医師と医学用語を用いて治療法の検討を行っていたという。インフォームド・コンセントが叫ばれる時代だが、こんなにも自分の病気に対して熱心になれる患者は、世界中にどのくらいいるのだろうか。彼は回復しツール・ド・フランスで優勝するという目標に向かって、ただひたすらに癌という自分の敵と戦っていたのだ。

この本を読んで、病気を克服するのに必要なのは、検査の数値や回復率などの医学的なデータばかりではないのだと思った。病気から回復して元気に暮らす自分を想像し、それを目標にすること、克服できると信じることで、そして何より自分が病気ときちんと向き合い、病気のことをよく知ろうとすること、こういうことが、精神的な面においてすごく重要になってくるのではないかと感じた。

ランス・アームストロングは苦しい闘病生活を乗り越え、1999年に自転車レースの最高峰と言われるツール・ド・フランスで個人総合優勝し、奇跡の復活を遂げた。また、翌年に開催されたシドニーオリンピックにもアメリカ代表として選出された。復活した1999年から現役引退を表明した2005年まで、ツール・ド・フランスで個人総合優勝をし続け、前人未到の7連覇を達成し、その記録は今もなお、破られていない。

睾丸癌というまれな病気にかかり、死に瀕しながらも、目標をみつけ、さらにその目標を達成したランス・アームストロングという男の生き方に感動した。  
(原稿受付 平成24年10月31日)

### 優秀賞を受賞して

波平 祐希

まさか、自分の書いた読書感想文が賞をもらえるなんて思ってもみなかった。これをきっかけに、さらに本を読むことに親しんでいきたいと思った。

### 優秀賞

## 『この子達を救いたい』を読んだ感想

薬学部 薬学科 1年次生 諸星 六郎



書名 この子たちを救いたい  
著者 濱井 千恵  
出版社 エフエー出版

本書『この子達を救いたい』では、「動物の命を救う会」に属する筆者（濱井千恵さん）が、自身の過去の経験から、「世の中のペットが簡単に飼育放棄されている現状」、また自身が所属する団体を通して知りえた「実験動物の悲惨な現状」を紹介することで、人々の動物に対する認識に対する疑問が投げかけられている。（本稿では、字数の関係上実験動物に関する感想は記さないでおく。）

濱井千恵さんは、本書発行当時、それまでに捨て犬を7匹、捨て猫を14匹自身で引き取り育てており、別の捨て犬6匹の里親を手配するなど、見捨てられた動物の救済に尽力してきた方である。決して裕福な家庭ではなかったにもかかわらず、経済的な負担を負いながらも率先して捨て犬や猫を引き取り、育ててきた。

この背景には、彼女が幼い頃より受けてきた家庭教育がある。父親は病弱であった彼女に、幼い頃から敢えて厳しく接し、泣き言を漏らすことを厳しく禁じるような、とても厳格な性格であったそうだが、こと彼女が捨て犬を拾って帰ってくると、「一つの命を大切にした」ということで決まって褒めてくれたそうである。また母親も、兄が虫を捕まえてこようものなら「短い命のものを捕ったらあかん。すぐに逃がしてこい」と言っていたという。幼いうちからこのようにして「身近な生き物を尊重し、大切にしなければならぬ」という意識が埋め込まれた彼女は、その後大人になり動物保護に関するさまざまな活動に身を投じてゆくこととなった。

彼女の考え方や行動は非常に立派であり、是非将来の子育ての参考にしたいと思わせるものであるが、本来であれば彼女が家庭教育を通して身につけた生き物に対する意識は、いわば常識としてだれもが持ち合わせていなければならない基本的な考え方のように思われる。しかし現実には全く逆であり、とても正気の沙汰とは思えないようなさまざまな事例が、本書の中で紹介されている。

ある子犬は、小さなダンボール箱に入れられ何重ものガムテープで封をされたのち、ゴミ捨て場に捨ててあったという。別の子犬2匹は、封はされていないものの、ダンボールに入れられた状態でトンネルのど真ん中に「どうぞ轢き殺してください」と言わんばかりに置いてあったこともあり、また雑木林に放置される犬猫も多く、だれも引き取らなければ当然保健所に連れ去られ、最悪殺処分ということになる。実際、最新の統計調査によれば、犬猫の殺処分数は平成12年の約52万匹から平成22年には約21万匹まで減少しており、年々減少していることは非常に好ましい傾向にあるが、それでもまだ20万匹という膨大な数の犬猫が一方的な人間のエゴで殺害されているわけである。

なぜこのようなことが起きるのか。結局のところ、この原因はまず「お金を出せば気軽に購入できる」という点にあると思う。「お金を出せば気軽に購入でき、（特定の動物を除き）飼育に関して特に規制がない」というところから「手軽な精神安定剤、慰めもの」という認識、より極端に言えば「使用期限（寿命）のある玩具」という認識が無意識のうちに成り立ってしまっていることにあるのではないだろうか。このような認識である以上、ペットとなった動物に対する、1つの命としての「尊厳」や「尊重」という意識が芽生えるわけがない。ゆえに都合が悪くなれば、いとも簡単に破棄できる、ということになる。

以前ニュースで、福島原発事故によりやむを得ずペットを置き去りしたまま避難したある主婦が、数か月後実家に帰ると、案の定変わり果てたペットの姿を発見し、泣き崩れる映像を目にした。彼女は「ごめんなさい、ごめんなさい・・・」と泣き崩れながらペットの死骸に何度も手を合わせており、確かにその光景は非常に痛ましく、彼女の気持ちを察するに余りある。しかし一方で「ペットではなく、例えば幼い我が子などであった場合、同じように“やむを得ず”置き去りにしたであろうか。我が子とペットを天秤にかければ、それはもちろん我が子の方が重要な存在であろうが、同じ“かけがえのない命”であるにもかかわらず、一方は“例外なく”何が何でも救出するが、もう一方は“やむを得ず”救出を断念されるという“例外”が簡単に適用されてしまうのはおかしいのではないか」と感じずにはいられなかった。

また、濱井千恵さんは言及されていないが、そもそも動物の殺害に「処分」という言葉が平然と使用されていることも大きな問題であるように思う。「処分」という言葉は本来無機物に対して使われる言葉であり、この言葉が生物に対して当然のように使われていることそのものが、非常に深刻な問題であるように思う。些細なことであるかもしれないが、名称を適切なものに変えてゆくところから始めないと、人間の意識は変わっていかないのではないだろうか。

ゆえに、動物の購入に規制を加えること、処分という言葉廃止し、別の適切な名称を使用すること、また動物という「命あるもの」に対する意識教育をしっかりと行うということが、安易なペット放棄を防ぐ上でとても重要なことであると思われる。

（原稿受付 平成24年10月19日）



## 優秀賞を受賞して

諸星 六郎

優秀賞受賞にはかなり驚きました。自分なりに良い内容の文章が書けたとは決して思っておらず、とにかく言いたいことを好きなだけ文章という形で吐き出したという感じだったので、それが評価されたのはもちろん嬉しくはありますが、正直かなり意外に感じました。正直な気持ちをぶつけた方が評価されることが分かったので、次回もアグレッシブに書きたいと思います。どうも有り難うございました。

## 優秀賞

## 理解こそ真の解決のキー

未来創造学部 国際マネジメント学科 4年次生 郭 純



書名 われ日本海の橋とならん  
著者 加藤 嘉一  
出版社 ダイアモンド社

今の中日両国の関係はきわめて悪化しつつある。メディアの多くは今の状況を国交正常化40周年以来の最悪とし、問題の深刻化が浮き彫りになった。在日中国人留学生としての私は、この事件を注目し続け、関連する資料と本などもできるだけ読み漁り、自分を納得させる真実に近づこうと努力している。その中、特に印象に残った一冊は中国で非常に名を知られた加藤嘉一という日本人の若手研究家が日本語で書いた処女作で、タイトルは『われ日本海の橋とならん 内から見た中国、外から見た日本——そして世界』である。日本に留学する前から彼の中国語で書いたコラムを興味津々に読んでいたが、中国語での文章なので、時事問題についてのコメントが多く、中国人向けの内容ばかりとの印象が強い。一方で、彼が日本人として親しみのある母国語で考えるものを自国の人たち向けに書いた本は違う角度を与えてくれるのではないかと思い、この本を買ったわけである。一気に読み上げ、実に予想以上のインパクトを感じた。

たとえば、中国の反日感情について彼は本の中でこう書いてある。

中国において、反仏であれ反米であれ、その動きが「反政府」につながる可能性は皆無に等しい。たとえデモが起きたとしても、政府が沈静化に乗り出せば、ほどなく収束に向かう。なぜなら、そこに正義はないからだ。

しかし、「反日」は違う。ナショナリズムに駆られた若者たちにとって「愛国は正義」であり、「反日も正義」である。少なくとも、彼らはそうしたロジックに基づく教育を受けて育ってきた。反日デモを力づくで鎮圧された場合、彼らは猛烈に反発するだろう。反日を唱えている以上、正義は自分たちの手にあるのだ。

これは愛国教育という諸刃の剣がもたらした、まったく新しいリスクである。

中国人として納得すると同時に、考えさせられた鋭い分析なのである。中国は日本と違い、多民族の上、人口が多いなどの特徴があり、すべての物事を単一的な角度から捉えきれないのである。途上国のものである反面、総合国力で超大国ともいえる。一党独裁とはいえ、すべての人たちは同じ考え方を持つわけでもなく、自由な言論環境もインターネットの発展に伴い、徐々に整えてきた。これらのすべては中国

の現状で、決してひとつの言葉でまとめられないのである。生まれてから20年以上中国で生活してきた私でさえ、中国のことをよく理解していないのである。それがゆえに、多くの日本人が不思議に思うかもしれないが、この本の著者である加藤さんはアイドルではないのに、中国で人気を博し、胡錦濤国家主席と面会する機会まで得た有名人になった。中国人は日本のことを知ろうとしている。幼い頃から日本のアニメや漫画を見て育てられてきた私の世代の若者は特にその傾向が強い。政治や軍事は冷え込んでも、経済や、文化・生活などソフト面ですでに緊密につながっている今、お互いの関心は冷め切ってはいけない。深まる溝を埋めるには、批判だけでは解決できない。体制、価値観、国情の違いに配慮し、真剣に理解しようという姿勢が大事なのではなからうか。

角度を変え、この本の著者加藤さんが一人の若者としてこれまで成長してきた経歴に注目するのも興味深い。日本の若者は、内向き志向が強いといわれる。ただ、国際舞台で活躍している若者もいるし、ノーベル賞を受賞した若手科学者もいるこの国にはきっと明るい未来があると信じる。

中日関係に依存と不信が共存している今、中日国交正常化40年という節目で、双方をつなごうとする一人の若者の本でわずかなりとも客観的に問題を見直す考えを持ち始める人が増えれば喜ぶべきものである。  
(原稿受付 平成24年10月11日)

## 優秀賞を受賞して

郭 純

今回優秀賞に選ばれたことは誠に光栄です。子供の頃から本を読むのが好きで、本を通じて未知の世界が目の前に広がったのが何より楽しい経験です。

授賞式でインプットとアウトプットが読書に与えた意義の違いという田中先生の話聞いて、読書への認識を改めました。マスコミは若者の読書離れ現象を大きな社会問題としてしばしば取り上げていますが、私はその考え方に賛成しません。時代と技術の進歩につれて、われわれは読み方こそ昔と違うかもしれませんが、決して何も読まないことはないのです。情報が溢れ出す今の問題は、本を読まないということより、何をどう読むかこそを深刻に捉えるべきではないでしょうか。そこで、今図書館1階の読書コーナーで行われている「今日は何の日」という、本と歴史事件とをつなぐ企画がとても興味深いです。これからも図書館が、われわれによい生活を送るための提案を与えてくれることに期待しています。

## 優秀賞

### 『舟を編む』を読んで

未来創造学部 国際教養学科 3年次生 谷口 真悠



書名 舟を編む  
著者 三浦 しをん  
出版社 光文社

これは一冊の辞書をいろんな人の人生をかけてつくりあげていく物語です。まずこの本を読む前の私の辞書に対するイメージですが、ある特定の分野（日本語だとか漢字だとか）の知識に長けた人が一年くらいで書くことのできるものだと考えていました。そういう例もあるようですが、この本に登場する辞書に

たくさんの方が関わり、長い年月をかけてようやく完成させるのです。そのことにわたしはただただ驚きました。辞書を編集する主人公・馬締だけでなく、他部署から馬締を探して引き抜いてきた荒木、日本語研究に一生を捧げる松本先生、だんだん辞書作りに愛着を感じてくる西岡、西岡の後任の岸辺、馬締の辞書作りを支える妻の香具矢、契約社員として働く佐々木、その他にも、校正のアルバイト達や印刷会社など本当に様々な人がそれぞれの立場で辞書づくりに関わっていきます。

私はこの本に登場する辞書の名前である『大渡海』の由来に関する荒木の言葉にも強く惹きつけられるものがありました。それは、「辞書は、言葉の海を渡る舟だ。ひとは辞書という舟に乗り、暗い海面に浮かび上がる小さな光を集める。もっともふさわしい言葉で、正確に、思いを誰かに届けるために。もし辞書がなかったら、おれたちは茫漠とした大海原をまえにたたずむほかないだろう」という言葉です。なぜ惹きつけられたのかというと、人生をかけてこの辞書をつくらうとする荒木の強い思いが見えてくるのと同時に、馬締を中心として全員で海を渡るにふさわしい舟を編んでほしいという願いが込められていたからです。

私はもうすぐ就活という時期に差し掛かり、自分がどこでどんなふうに通きたいか考えるとき、よく見知った会社の名前や仕事の華やかな面も魅力的で、目が行きがちですが、『舟を編む』のように、言葉の意味を一語一句確認したり、辞書を何回も読み返して間違いがないか探したり、『大渡海』にふさわしい紙を何度も研究・改良したりと、地道な、そして妥協のない「良い仕事」をしていると言われるような誇れる仕事をしていきたいです。そんな会社、企業が人を見えない部分で幸せにしているのではないのでしょうか。また、働くということはたくさん人間が関わりあって成り立っているものです。馬締一人だけでは決して辞書は完成せず、それこそ学者からアルバイトまで様々な人が辞書に携わっています。そのことも忘れずに、これから臨んでいこうと考えを新たにすることもできました。

ただ、長い年月をかけて「良い仕事」を行うことはいつも楽しいことばかりではありません。辞書づくり・日本語研究に一生を捧げた松本先生は、『大渡海』の完成を見ることなく世を去りました。馬締が悲しみの中で思うもの、それもやはり言葉に対する強い思いでした。「先生のすべてが失われたわけではない。言葉があるからこそ、一番大切なもの、先生の思い出が俺たちの心の中に残った。それらを語り合い、記憶を分け合い伝えていくためには、絶対言葉が必要だ。」そんなふうにはひとの魂をのせて言葉の海を渡る舟を編む、と。なにかに対する一途な一生懸命な思いとは、言葉によって長く受け継がれ、残っていくと私に教えてくれました。辞書をつくることに真剣に取り組み、良いものを残していこうと努力するとともに、それを受け継ごうとしていくチームワークの大切さ、これも仕事をしていく中では欠かせません。

私はこの本のなかでこのようにたくさん新しい発見をすることができました。『舟を編む』を読むときは、つい自分の状況に置き換えながら読んでしまいましたが、仕事だけでなく、人生において言葉の大切さ・可能性を辞書づくりとそれに関わる人々が教えてくれた気がしました。

(原稿受付 平成24年10月26日)

## 優秀賞を受賞して

谷口 真悠

読書感想文コンクールで優秀賞という素晴らしい賞をいただいたことを大変うれしく思います。『舟を編む』の著者である三浦しをんさんの作品はどれも大好きで、毎回読みながら様々なことを考えさせられます。そして今回『舟を編む』を読んでみて、何十年もの時間をかけて一冊の辞書を作り上げていく主人公や支えとなってくれる人々の姿に触れて、ちょうど就職活動中のわたしにとって、働くとはどういうことなのかについて学ぶことがたくさんありました。これからも読書を通して自分自身も一緒に成長していきたいと思えます。

## 各審査委員から一言



審査委員  
村田 慶史  
(薬学部教授・学術資料部長)

同じ1冊の書物に出会っても、人によって感想が異なるのは、読者がそれまでの人生経験に基づいて新鮮な感動を覚えたり、共感したりするからではないかと思います。そして、その想いを自分の言葉で表現して他人に伝えることは、気力と時間を必要とする知的作業であり、特に留学生の皆さんには、言葉の壁を乗り越えての応募、改めて敬意を表します。今回、多数の読書感想文を拝読させていただきましたが、鋭い感性に驚いたり、面白い表現に微笑んだり、さらには、間接的ではありますが、応募された方の人となりに触れることができた気がいたします。いずれ劣らぬ力作で、甲乙をつけるべき類のものではありませんが、そこはコンクールということで審査させていただきました。時代の移り変わりとともに次々と新しい作品が創り出され、人々に感銘をあたえる。それらの書物や感想文との出会いを通じて、私自身もより深い人生を歩んでいけたらと思います。



審査委員  
安池 修之  
(薬学部准教授)

感想とは「心に浮かんだ思い」と広辞苑に記されている。読書感想文とは本を読み、頭で考えるのではなく、心に響いたことを文章に起こしたのではないだろうか。今回の応募作品は、自らを奮い立たせる思い、生と死についての思い、家族との思い等々、多くの学生諸君の「心の声」を聞くことができ、感動を覚えた。同じ本を題材にした感想文も複数あった。読者の切り口が異なるとこんなにも感想に変化が生まれるのかと、とても驚かされた。同時に学生諸君の感性の豊かさに感銘を受けた。

学生諸君は多くの場面でレポートを課せられている。これは、しっかりとした理論を基に自分なりの考えを文章にまとめる必要がある。日々、試行錯誤していることだろう。読書感想文は心に浮かんだ思いを文章にしたため、自分の素直な思いをぶつけるだけでいい。次回も多くの応募を楽しみにしている。



審査委員  
加藤 幸子  
(教育能力開発センター講師)

人の一生は短く、実際に体験できることは限られているが、本を読むことで多くの疑似体験ができ、人間的に成長できると信じています。日々の出来事に対し、限られた体験からは、独りよがりな考え方しかできないかもしれませんが、様々な本を読み、深く考えることで違った視点からものを見ることができるようになるでしょう。

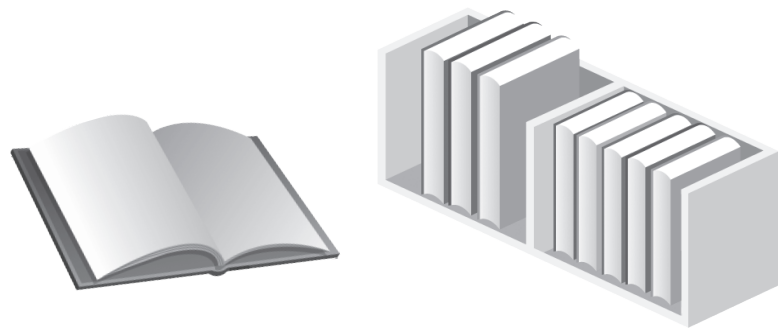
西東輝さんは、『なぜ「そうじ」をすると人生が変わるのか』を読むことにより、挫折から立ち直ったことを書きましたが、本の力が大きいことを実感する感想文でした。また、留学生の郭純さんは『われ日本海の橋とならん』を読んで、互いの「理解こそ真の解決のキー」であるとの結論を導いた。隣国との領土問題は、心痛める問題ですが、お互いに理解し合おうという若者がいる限り、いつかは再び良好な関係に戻る事ができるだろうという希望がもてる感想文でした。

「読書感想文コンクール」は、本を読み、考えたことを発信する良い機会だと思います。多くの学生が、良書を見分ける力を付け、本と向き合い、発信して欲しいと思います。

寄 贈 図 書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書 名	寄 贈 者
「技術移転ガイドブック：大学の研究成果を実用」他 計 15 冊	三浦 雅一（薬学部長）
「石川県の歴史」他 計 9 冊	小林 忠雄（未来創造学部教授）
「新家事調停の技法」	胡 光輝（未来創造学部講師）
「医歯薬系学生のための illustrated 基礎物理」 2 冊	竹井 巖（教育能力開発センター准教授）
「チーム」他 計 24 冊	泉 洋成（事務局長）
「アランの幸福論」他 計 11 冊	北野 安人（アドミッションセンター課長）



編 集 後 記

『沖縄県史』によれば、かつての琉球王朝の『正史』には、王の祖先は「鎮西八郎源為朝」であったと書かれているとのこと。沖縄の人たちは、そのような認識のもとで暮らしていたことが分かります。『正史』はその地域の正式な歴史書ですので、物事を判断する上で根拠となります。書かれた当時はその地域の公式見解であったという事実が存在します。これにより、大和朝廷に属すると地域の王朝が認識していたということも分かります。これが、歴史に基づく認識でしょう。（柿木）

CONTENTS

	頁
○ 大学生のための読書感想文コンクール ……………	1
○ 第12回北陸大学読書感想文コンクール	
入賞者を表彰	
・入賞作品 ……………	2
・最優秀賞、優秀賞感想文……………	3
・審査委員から一言 ……………	11
○ 寄贈図書 ……………	12



北陸大学  
HOKURIKU UNIVERSITY

北陸大学ライブラリーセンター報

NO.34

平成25年3月28日発行

編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター

〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1

TEL. 076-229-3021

FAX 076-229-4850

ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp

北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/

印 刷：カンダ印刷株式会社

※ライブラリーセンター報は、大学ホームページでもご覧いただけます。